

06・指も、おっぱいも舐められて、貝合わせする

『05・スマホの灯りしかない夜の地下書庫で、クラウドディアに誘惑される』から、そのまま続き。

主人公とクラウドディア、クラウドディアのスマホから出る懐中電灯の光の中、読書机の前で向かい合っている。

主人公、クラウドディアに誘惑されて、あっさりくらくら来ている。

クラウドディアがかわいくてしょうがない。

今はまだ理性と欲望が戦っているが、理性が負けるのは時間の問題だ。

……でも、図書館ってどうなんだろう。

図書館にあるものって板でできているものばかりで、身体を押し付けたら痛い、あるいは冷たそうなものばかりだし。

そんなところをするのってどうなのかなあ……。

ディディが痛い思いをしそうな事は嫌なんだよなあ……。

この子、痛くても寒くても、絶対我慢して言わないだろうし……と思う。

でも、あんな事されたら平静じゃいられないんですけど……と悩む。

だが、やはり理性が負ける。

ちよつとだけなら……きつと、ちよつとじゃ済まないけど……。と思いつつ、近づく。
主人公、クラウドディアを机側に追い詰めるような形で近寄り、抱きしめる。

SE1 .. 地下書庫の環境音

【トラック5のSE1と同じ音】

【頭から最後まで流す】

【トラック終わりまでごく小さな音で流す】

SE2 .. 主人公がクラウドディアに近づく足音

【トラック5のSE5と同じ音】

【0―1秒ほどまでの『3歩分』のみ流してSE3】

【若干響く加工をする】

SE3 .. 主人公がクラウドディアを抱きしめる音

【頭から流す】

【0—3秒ほどまで流してセリフ】

●中央 非常に近い

「【抱きしめられて】

ん……♡

【軽く一度だけキスする】

ちゅ♡

【嬉しいが、少し心配】

いいんですか？」

〈主人公〉

「鍵かかってるし」

●中央 非常に近い

「【普通に相槌を打つ】

うん」

〈主人公〉

「出たくても出られないし」

●中央 非常に近い

「ちよつと甘えた声になる」

うん」

〈主人公〉

「暖房まで切られちゃったし。デイデイがこんな事言うし……」

●中央 非常に近い

「すぐく甘えた声になる」

うん♡」

〈主人公〉

「だから、もうちよつとだけならいいかなあつて……」

● 中央 非常に近い

「嬉しくてしょうがない」

そうです♥ 私たち悪くないです。

だから、ちよっとくらいイチャイチャしたっていいんです♥」

クラウディア、内心『やったあ!』と思う。

だがこれは、主人公の意向を無視して、言う事を聞かせた事にはならないか。

……そもそも、誘惑ってそういうものだけど。

自分よりもさらに心の弱い主人公は、こんないけないシチュエーションに耐えられるだろうか。

……耐えられない気がする。

いや、もっと正直になろう。心の弱い自分は『言葉巧みに主人公を惑わして、言う事を聞いてもらった』という事実耐えられる気がしない。私の弱さ、本当に侮れない。やっぱりここはあきらめよう。無理やり言う事を聞いてもらっても、意味がない。

でも、ちよつとだけ……。

● 中央 非常に近い

「ちよつと申し訳なくなってくる」

……ほんの少しだけでいいんです。

さっきまでと同じでいい。

もうちよつとだけ、キスしたり、おしゃべりしたり、したいです。そしたら私、ちゃんと先生の言う事聞いて、いい子にしますから。

だから……」

クラウディア、今になってようやく気付く。

主人公は望みの言葉をクラウディアに言わせたがる『言わせたい系』だ。

自分はそんな主人公をしようがない人だなと思いつながら『言わされて』きた。

だが、自分も似たようなものだった。

自分はいつでも、主人公に背中を押してもらいたがっている。

初めて話した時も、プールに飛び込んだ時も、今も同じ。

チラチラと主人公の方を伺いながら、望みの行動を取るための許可を求めている。

そんな浅ましい自分を許してほしいと願いながら『拒絶してくれたら楽なのに』とも思っている。

だけど主人公は、いつもそんな自分を受け入れる。

この人は本当にバカだ。愚かで、浅知恵ばかり働く、大した事のない自分にいつも優しい。

そのせいで、しなくてもいい苦勞をたくさんして、払う必要のなかった、たくさん犠牲を払いながら、自分と一緒にいてくれる。

主人公の顔が近づく。クラウディアは目を閉じる。

SE 4 ..クラウディアの身体が机にぶつかる音

【途中から流す】

【2―3秒ほどの『トン』1回分のみ流す】

【小さめの音量で流す】

●中央 非常に近い

【※30秒※ ほどキスする。深くて、ゆっくりした濃いキス】

ん♥ んんう……♥ ちゅ♥ ちゅくっ……れろっ……ちゅるるっ♥ ん♥ ちゅぼっ

♥ んんっ……♥ ちゅっ♥ ちゅっ♥ ちゅるっ……ちゅっ♥

【ゆっくり唇を離す】

ん……。

【すぐドキドキしている】

先生、あの、これは……。

【言葉の途中でキスされる】

ん♥

【※30秒※ ほどキスする。また、深く、ゆっくりした濃いキス】

んう……♥ ちゅばっ♥ ちゅばっ♥ ちゅるるるっ……ちゅっ♥ んん……ん
んうっ……♥ ちゅぶっ♥ ちゅるっ♥ ちゅっ♥ ちゅっ♥ ちゅっ……♥

【気持ちよくて、完全にスイッチが入る】

先生……。これ、ダメです。ほんとに、したくなっちゃう……。」

〈主人公〉

「ここ、座って？」

クラウディア、主人公が自分の言葉を見殺しして、座るように促した事に驚く。
さらに、口調は優しいが、有無を言わせない雰囲気にはドキドキする。

これから起きる事に、ただただ期待する。

●中央 非常に近い

「ドキドキしてうまく返事ができない」

あつ？ ここ、座るの？

「少し間をあけてから。緊張してきた」

はい、わかりました……」

SE5 ..クラウドディアが書庫の机に腰掛ける音

「頭から最後まで流す」

「かなり小さめの音量で流す」

●中央 非常に近い

「ものすごくドキドキする」

私、机の上に座ったのなんて、生まれて初めてです。

なんだか、すごく悪い事をしている感じがします……♡」

クラウドディア、かなり興奮している。

今日の主人公は、なんだかちよつと違う。

もしかしたら今日は、いつもより、ちよつと乱暴なのをされちやうのかもしれない。

正直、ちよつと怖い。だけど、主人公ならきつと大丈夫……。

クラウディア、そうは思いつつも少し不安になる。

自分で望んだ事とは言え、こんな展開は初めてだからである。

だが、顔を上げて、心配そうな主人公の顔を見た途端、クラウディアの心は一気にほぐれる。

〈主人公〉

「机、冷たくない？ 平気？」

クラウディア、思わず笑ってしまう。やっぱり主人公はいつも通りだった。

主人公はおそらく、さっきからこれを気にしていたのだ。

だから、きつと乗り気じゃなかったのだ。

確かに、この人はもうちよつと強引さを身につけてもいいのかもしれない。

恋人にセックスに誘われてるんだから、細かい事をいちいち心配したり、確認したりし

なくてもいいのかもしれない。

でも、クラウディアは主人公のそういうところが大好きだ。

不安そうに氣遣われるたびに、自分は大切にされているんだと実感して、ドキドキする。触れてくる指や、唇は、今でもたどたどしい。

だけど、その優しさや愛情で、クラウディアの快感は何倍にも増幅される。すごく気持ちいいし、もっとしてほしいと強く思う。

今も、まだキスしかしてないのに、身体の真ん中がじゅわっと熱くなった……。

● 中央 非常に近い

「【安心する】

平気です♥

むしろ暑い、くらいです。すごくドキドキしてる……。

先生こそ、寒くないですか？」

〈主人公〉

「寒い。ディディにあっためてもらわないと凍えちゃう。

まだまだ一緒にいたいので、そうしてくれませんか？」

クラウドディア、主人公に甘えられて、脳がとろけそう。

『いいんだ。まだまだ一緒にいて、いいんだ!』と思うと、嬉しくてたまらない。

●中央 非常に近い

「【甘えた声で】

うん♡ 私があっためます♡」

SE6 ..クラウドディアが主人公に抱きつく音

【頭から流す】

【0―3秒ほどまで流してセリフ】

●中央 非常に近い

「【うっとり】と

嬉しいな……先生の方から『まだ一緒にいたい』って言ってもらえた……」

クラウドディア、椅子に座った状態でうっとり主人公に抱きついて、足まで絡める。
だがここで、主人公の方がふと冷静になる。

『先生の方から、まだ一緒にいたいって言ってもらえた？』
その言葉は聞き捨てならない。

もしクラウディアが本気で言ってるなら、認識の差異があるのはまずい。

〈主人公〉

「え？　言い足りてなかった？　ごめんね。

でも、だいたいいつも言ってるじゃない？　むしろいつもわたしの方が必死じゃない？」

クラウディア、これによって、ちよつと我に返る。

まったくその通りです。

『その通りだね。事実を捻じ曲げて、甘い雰囲気に取りつかただけなのがバレちゃった』
と思う。

主人公は、いつでもクラウディアと一緒にいてくれる。

どうしても無理だった事はあるが、たとえばデートをドタキャンされたり、来るはずの連絡がなかなか来なかったりなど、理不尽に淋しい思いをさせられた事などは一度もない。
だからいつも不安じゃなかった。自分はこんなに自信がなくて、常軌を逸するほど心が

弱い人間なのに、この恋に対してだけは、辛い、もう耐えられないと思った事がちつともなかったのである。

●中央 非常に近い

「『おっしゃる通りです』と思っている」

まあ、そうかも。

【甘えた声で開き直る】

でも、いつも嬉しいんです。

【少し間をあけてから】

だって私、もっと淋しいんだと思ってました。

先生とお付き合いできて、二人で会うのなんかきつと全然できなくて。

連絡もそんなに取れなくて。

だけど、先生のクラスの子とか、部活の子とかはいっぱい先生といられて、いつもおしゃべりしてて……。

私はそれが苦しくて、不安で、辛くて。

きつとどんどん病んでくんだろうと思ってました。

【少し間をあけてから】

でも、全然違ったし。

外で堂々と会うのは無理でも、先生、いつもいっぱい考えてくれて。色々連れてってくれるし。

連絡もたくさんしてくれる。

どうにもならなかったの、本当に修学旅行くらいですよね？
だから、私ちっとも淋しくなかった。

【泣きそうになる。気持ちがたかぶる】

こんなの変ですよ。

夢だと思ってたのに全然覚めないの。

私、ずっと嬉しいの。

先生が大事にしてくれるから、私、ずっと幸せなんです」

〈主人公〉

「デイデイ……」

クラウドディア、手を伸ばして、主人公の手を取る。それから、自分の頬に重ねる。

SE7 ..クラウドディアが主人公の手の甲を撫でる音

【頭から流す】

【0―3秒ほどまで流してフェードアウトする】

【小さめの音量で流す】

●中央 非常に近い

「ふふ。あったかい。先生の手、好き。」

いつも優しい。いつも助けてくれる……」

クラウドディア、そのまま主人公の手を自分の口元に持って行って、人差し指をくわえてなめる。

●中央 非常に近い

【※30秒※ ほど人差し指を指舐めする。指の付け根から吸い上げて、ゆっくり上がっていき、指の腹（指紋のあるところ）を集中的にちゅぱちゅぱ吸う】

※静かめに。あまり激しく音を立てないようにする※

んっく……ちゅぽっ♡ じゅる……ちゅぽっ、ちゅぽっ、ちゅぽっ♡ じゅくくっ……

れろっ♡ ちゅぽっ♡ ちゅぽっ♡ ちゅるっ、ちゅるっ、れろろっ♡

【指をくわえたまま話す。うまく話せず『ひほひひい?』みたいになる】

気持ちいい?

【吸う指を変える】

こっちも……。

【※30秒※】 ほど、中指を指舐めする。指の付け根から音を立ててじゅるじゅる吸い上げて、ゆっくり上がっていき、指の腹（指紋のあるところ）を集中的にちゅばちゅば吸う※
※静かめに。あまり激しく音を立てないようにする※

ちゅぽっ♡ ちゅっ。ちゅっ♡ じゅるるっ♡ れろっ、れろっ……ちゅぽっ♡ ちゅるるっ♡ れろ、れろ、べろっ♡ ちゅく、ちゅく、ちゅくっ♡ ちゅるるっ♡

【指をくわえたまま話す。先ほど同様、うまく話せない】

ふふ。先生の指、おいしいです……」

クラウディア、主人公の指をなめているうちに激しく興奮してくる。
主人公の左耳に顔を近づけて、そっとささやく。向かって右。

●左 ささやく 非常に近い

【甘くささやく】

先生。もっと舐めたい……おっぱい見せて？」

少し距離が離れる。

SE8 ..クラウドディアが主人公の服を脱がせる音

【頭から流す】

【0―15秒ほどまで流してセリフ】

主人公、ドキドキしながら、自分で服を脱ごうとする。

だが、そこでクラウドディアの手が伸びてきて、脱がされる形になる。

クラウドディア、主人公のブラウスのボタンを外していく。

主人公はされるがままになり、自分の服を器用に脱がしているクラウドディアを見ている。

クラウドディアの指先が、まるで、自分自身の服を脱いでいるかのように手慣れたようすだから、ますます見入ってしまう。

彼女をこんな風にさせたのは自分なのだと思うと、息もできないほど、気持ちが高ぶる。

クラウドディア、主人公のブラウスのうち、スカートの中に入っている部分の真上までボタンを外す。

次に、ブラウスの中が見えるように両手で開き、下着を露出させる。

それから、服の中に手を入れて、器用にホックを外す。

最後に、主人公のブラジャーをもう一度見て『これ見た事ある。無理やり引っ張ると痛いタイプの、硬いワイヤーのやつじゃない。大丈夫』と確認してから、ぐいっとカップを下ろす。

クラウドディアの目の前に、露出した主人公の胸がある状態になる。

〈主人公〉

「ねえデイデイ。これ、すごい恥ずかしい……」

● 中央 近い

「【楽しそうに笑う】

ええ？ 自分はいつも私にするのに？

【優しく、うっとり】と

恥ずかしくないですよ。先生のおっぱい、綺麗。大好きです。

【少し間をあけてから。主人公の、まだ勃起してない乳首を見ながら】
ああ……でも、ここ、まだちよつと寝てるかな。

【手のひらで胸を触り、指先で乳首をいじりながら話す】

でも、こうしたらすぐおつきしますよね？

【※マークまでゆつくりと。ちよつとだけ意地悪に】

ほら。こうやって軽くひっぱりながら、先っぽのざらざらしたところを指で撫でるの。気持ちいいですね？

私、いつも先生にいたずらされるから、自分で触るのも上手になっちゃったんです。

ふふ……♡」※

再び距離が近づく。

●やや右寄り 下 近い

【※30秒※ ほど、右の乳首を舐める。ちゅぱちゅぱ、優しく舐める】

※静かめに。あまり激しく音を立てないようにする※

んふっ……くちゅっ♡ れろっ、びちゃっ♡ ペろっ、れろっ、ちゅぱっ♡ ちゅくっ……ちゅくっ、ちゅるっ♡ ペろっ、ちゅぶっ♡ ちゅぶぶ……ちゅるっ♡

【一度口を離す】

両方しましょうね。

● やや左寄り 下 近い

【※30秒※】 ほど、左の乳首を舐める。ちゅばちゅば、優しく舐める】
※静かめに。あまり激しく音を立てないようにする※

SE8 ..クラウドディアが自分で自分の股間をいじる音

【頭から最後まで流す】

【規定の位置まで繰り返し返して流す】

【小さめの音量で流す】

んんっ……ちゅっ♥ ちゅっ♥ くちゅっ♥ ぴちやつ、ぴちやつ、れろっ♥ ちゅる、
ちゅる……くちゅっ♥ ちゅばっ♥ ちゅぷふっ……ちゅっ♥ っ

※ここでSE8がストップ

クラウドディア、主人公の乳首を吸いながら、自分の股間に手を伸ばす。
そのままタイツと下着の中に右手を入れ、ぐっしより濡れた自分のクリトリスを愛撫す

る。

それでも別に、我慢ができなくなった訳じゃない。

ただとてもむずむずして、そういう気分になっただけだ。

そもそも、正直、この座り方じやタイツが邪魔で、全然思うところに手が届かない。別に気持ちよくない。

それでもこうする理由がある。

だって、自分がこんな恥ずかしい姿を見せたら、主人公ももっと興奮してくれて、もっと色々してくれるかもしれないし……。

でも、主人公に気づいてもらう事を前提に、彼女の目の前で自慰をする自分は、すごく卑しい気がする。

というか、それは今に始まった事じゃない。自分はいつも卑しいのだ。素直な行動というものが全然ない。

自分は、いつも主人公の気を引きたい。

少しでも構ってほしいし、少しでも良く思われたい。

でも、それを正直に言えないから、いつも計算している。

主人公に注目されそうな行動を、必死に考えて、取っている。

でも、それくらい、みつともないくらい主人公を求めている事を知ってほしい。
こんな自分を許して、必死な姿を『かわいい』と言ってほしい。
そうしたら、自分はきっと……。

そんな事を考えていると、主人公がクラウドディアの行為に気づく。
胸を吸われながら目を閉じていたらしいが、音で気が付いたらしい。

主人公は一瞬『なぜそんな事を?』という表情になるが、すぐに目を見開いて、クラウドディアの股間を凝視する。

鈍感な主人公でも、自分がこうしている意図はわかったのだろう。
興奮した目つきで見下ろされ、クラウドディアはぞくぞくする。

〈主人公〉

「やらしい……♥ 自分はいつもわたしにするなって言うのに」

● 中央 近い

「乳首から唇を離す。指摘されて、むしろ嬉しそうにする」

えへ……」

〈主人公〉

「自分で触るのって禁止なんじゃなかった？」

……もしかして、わたしに、見てほしかったの？」

● 中央 近い

「【とても興奮している】」

……うん。触りました。

私、先生にはダメって言う癖に、自分は触っちゃいました。
先生に見てほしかったの……」

〈主人公〉

「だめだよ。自分で触ってちや。スカートの中見せて？」

● 中央 近い

「【ものすごく興奮している】」

はい……♡ 先生、おしおきして下さい♡

私のスカートの中、どうなってるか、見てほしいです♡」

少し距離が離れる。

SE9 .. 主人公がクラウドディアを机にそつと押し倒す音

【頭から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

● 中央

「【押し倒されて少し驚く】

あ……」

クラウドディア、押し倒されて机の上にあおむけに寝転がり、両足を開かされる。

当然、スカートはめくれ上がっていて、下着が見えそうだ。

こんな事はされた事がない。机に乗ったのが生まれて初めてなんだから当たり前だ。机は確かに冷たいが、今はそれほどじゃない。

〈主人公〉

「タイツ破れちゃうから、脱がすね」

● 中央

「ドキドキして声が震える」

はい……」

そこで、主人公の視線が、ふと、クラウディアのつま先に移る。

〈主人公〉

「ああ……」

クラウディア、主人公が自分の靴を邪魔そうに見るので、ぞくぞくする。
見た事のない表情だ、と思う。

それでも主人公は、きつと丁寧に靴を脱がして、そっと床に置くのだろうと思った。
でも、違った。主人公はクラウディアの足首を軽く持ち上げると、ぱちん、と、足首に
巻かれたストラップを外す。

そのまま、靴は脱げ、地下書庫の床に落ちる。
思った以上に大きな音がして、クラウディアは恥ずかしくなる。

SE11 .. 主人公がクラウドディアの靴を脱がす音

【頭から最後まで流す】

【かなり小さめの音量で流す】

SE12 .. クラウドディアの靴が、床に落ちる音

【頭から最後まで流す】

【小さめの音量で流す】

【少し響く加工をする】

● 中央

【少し驚く】

あ、靴

〈主人公〉

「あとでね」

クラウドディア、主人公は靴を拾いに、一度身体を離すのだろうと思った。
だが、そうはならなかった。

主人公の手は、そのまま下着ごと、クラウドディアのタイツを下ろしていく。
主人公は今、靴の事なんて忘れてしまっている。

そのくらいクラウドディアの事しか見ていないのだ。

それを実感して、クラウドディアはたまらなくドキドキする。

SE13 .. 主人公がクラウドディアの下着とタイツを脱がせる音

【頭から最後まで流す】

● 中央

【呼吸が荒くなる。すごく恥ずかしい】

はあ、はあ……。

【照れ笑いする】

タイツごと、脱がされちゃった。

恥ずかしい……そんなに近くで見ないで下さい……。

【太ももにキスされてびくつとする】

んっ♡

【そのままつま先に向かって、左足をなめられる】

あぁっ……足、舐めないで。恥ずかしいです……。あっ♡

【つま先にキスされる】

んんっ♡」

〈主人公〉

「中、すごいね。えっちな匂いする」

● 中央 近い

「【※マークまで、ものすごく興奮している】

やだぁ……っ♡ そう、ですよ。

【興奮しすぎて、高い、さえずるような声になる】

さっきから、熱くて。タイツどころか、スカートまで汚れちゃいました……。♡
どうしよう。こんな制服じゃ学校歩けないです。寮にも戻れない……。」

〈主人公〉

「自分で触ったから、ここ、ぐちゅぐちゅになってるもんね。
ぱんつにも、タイツにも染みてたよ。」

あれは、もう履けないね。帰る時も、今の格好で戻る？」

クラウドディア、主人公に言葉攻めのような事をされて、ドキドキする。でも、主人公の事だから、そんな意図は全然ないのかもしれない。

普通に『あんな状態の下着とタイツは履けないだろう』と指摘しているだけかもしれない。

どっちにしろ、クラウドディアはもうダメだ。

一刻も早く主人公にめちやくちやにしてほしくてたまらない。

●中央 近い

「もお。先生だって……絶対、濡れてる癖にっ♡

絶対、私と同じ風になってる癖にっ♡

【少しでも間をあけてから。甘ったるく誘う】

先生。私のぐちゅぐちゅのここと、先生のここ、くつつけるのしよ？

こうやって、足、持っていますから。

【懇願する】

くつつけて、くちゅくちゅして、一緒に気持ちいいのしましょ？」※

〈主人公〉

「うん……♡」

SE14 .. 主人公が、自分の下着とストッキングを脱ぐ音

【頭から流す】

【0―8秒ほどまで流してセリフ】

● 中央 近い

【ものすごく興奮している】

あ……すご♡ 先生もやっぱり、ものすごく興奮してるじゃありませんか。

全然人の事言えない。やらしい♡

【甘くかすれた声で】

先生、来て……一緒に悪い事しましょう♡」

クラウドディア、もう何も考えられない。

自分はいつも冷静で、いつでも主人公の気を引くために、ベストの選択について考えているはずだった。

でも今はできない。自分のしたいようにしかできない。

SE15 .. 机が揺れる音

【頭から最後まで流す】

【SE16と一緒に流す】

【小さめの音量で流す】

SE16 .. 主人公が、自分の性器と、クラウドディアの性器をこすりつける音

【頭から最後まで流す】

【SE15と一緒に流す】

【途中から、速度を上げて流す】

【後半からはさらに一段階速度を上げて流す】

【規定のポイントまで繰り返して流す】

【小さめの音量で流す】

● 中央 近い

【性器が接触して気持ちいい】

ん.....♥

【ゆっくりと】

はあ……あ♥ きもちいとこくつついた……♥

【照れ笑いする】

えへ。いっぱいしようね♥

【主人公がこすりつけ始めたので感じる】

んっ、あっ……♥ あっ……ああ……♥

【すぐく恥ずかしい。思った以上に大きな音がして興奮する】

ああ……♥ すごいやらしい音する……。

【足を高くあげられて恥ずかしい】

ああ……あまり足、上げないで。恥ずかしいです……。

【じわつと気持ちいい】

ん……あ♥ ああ……♥

【すぐく気持ちいいところにあたる】

ああっ……♥ すごいっ……♥

ん……♥ あ♥ 先生のと♥ 私の♥ 深く重なってるの♥ わかります♥

んっ♥ ん♥ ああ……っ、あ♥

【うっとり】

気持ちいい……気持ちいいですね♥

はあ……はあ……ああ……♥

ねえっ、先生♥

この学校でっ♥ こんな事したの♥ きっと私たちだけですね……♥
でも私。いけない事してるのに、すごく幸せです♥
好きです。嬉しい……先生と一緒にきもちいの嬉しい……♥

【唇をふさがれる】

ん♥

【※30秒※】 ほど、甘々にキスする。夢中で求め合っているイメージ】

ん♥ ふ♥ んう♥ ちゅっ♥ ちゅっ♥ んんっ♥ くちゅっ……ちゅぶっ♥
ちゅっ♥ ちゅっ♥ ちゅっ♥ れろろ……ちゅっ♥

先生……好き♥

【『もっと乱暴にしても平気なので、して下さい』という意味で言っている】

もっと、して、下さい♥

もっとぎゅっ♥ 身体にくっつけられるところ、全部くっつけたいです♥

先生、好き。大好きです♥

※ここからSE16の速度が少し早くなる

【※30秒※】 ほど、甘々にキスする。夢中で求め合っているイメージ】

んんう♡　ちゅっ♡　ちゅくっ♡　ちゅぶっ、ちゅっ♡　ちゅくくっ……ちゅっ♡　れ
ろっ、ちゅっ♡　ちゅっ♡　ちゅぶっ♡　ん……ちゅっ♡
【ゆっくり。すごく気持ちいいところにあたる】
あっ♡　あ♡　ああ♡　ああ♡

〈主人公〉

「デイデイ……♡　わたし、そろそろっ……」

● 中央　近い

「甘くかすれた声で」

せんせ……イきそ？　私も……
いいよ♡　このまま……♡　あ♡

※ここからSE16の速度がさらに少し早くなる

【※15秒※　ほど、甘々に喘ぐ】

あ♡　ああ……あっ♡　ん♡　ああ……ん♡　あ♡　あ♡　ああ♡　ああ……うっ♡

【クリトリスでイク】

ああああっ……♡」

※ここでSE16がフェードアウトする

SE17 ..主人公とクラウドディアが抱き合う音

【頭から流す】

【0ー7秒ほどまで流してフェードアウトする】

●中央

【※7秒※ ほどかけて呼吸を整える】

はあ、はあ、はあ、はあ……♡

先生……♡

うん♡ ぎゅってして……♡」

〈主人公〉

「平気……？ 身体、痛くない？」

●中央

「まだ息が苦しいが、すごく嬉しい」

大丈夫です♥　すごく気持ちよかった……。

「少し間をあけてから。うつとりと」

大好きです……内緒の思い出……また、増えちゃいましたね♥

「軽く一回だけキスする」

ちゅ♥」

このままフェードアウトして終了。